

立ち止まらず 勇んで動こう



婦人会総会に全国各地から大勢の会員が集まった (4月19日)

真明

発行所
天理教 芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

道の歩みに、沈滞は死滅を意味する、勇んで働く、このことがすべてを生かすた
だ一つの道である 『真明 芦津の道』 卷三

四方正面

「願はくは花の下にて春死なんその如月の望月のころ」。平安時代を生きた西行の辞世の歌である。春とは旧暦2月15日あたりを指し、15日は釈迦入滅の日でもある。西行は、そのあたりの桜満開の満月の日を望んだ。そして満月の16日に没した。齢73歳であった。

天理教婦人会の創立は明治43年ですが、それより10年以前、明治20年代の後半の頃から、初代真柱夫人・中山たまへ様を芯に、お屋敷の婦人が集まって信仰を談じ合う会合が始まりました。この動きは直属教会にも波及し、芦津では二代会長夫人・井筒たね様(後の三代会長)を中心に、明治27年秋から「婦人研究会」の名称で教理研究に励んでいました。

明治31年3月、婦人会を始め掛けるようにとのおさしづがありました。当時は内務省訓令による厳しい弾圧により、全教の動きが止まっていた時代でしたが、二代会長・井筒五三郎様の「勇んで動くこと。難境打開の道はこれのみ」との信念のもと、芦津婦人会はたね様を芯に、全教に先駆けて部内教会へ巡回を行い、婦人会の結成と会員募集を行いました。その年11月、芦津分教会婦人会は初の大会を開催しました。

二代会長ご夫妻が示された信仰信念、まず自ら勇んで動くこと。年祭が終わったからと動きを止めていては、次の旬になったときの動きが鈍ってしまう。動くことができるありがたさを噛みしめながら、おつとめおさづけ、理づくりに勇んで動きたい。

筆者は昨年末、後期高齢者の仲間入りを果たした。なので、少なくとも歳だけは西行を越えた。運転免許更新の煩瑣な手続きや講習も済ませ、未踏の域へと突入した。けれど人生百年の現代、かの師のように辞世の句を詠む心境も素養も筆者にはない。

ようぼくが国政の舵取りとして日々奮闘される昨今、我もようぼくの一人として、世界の争いの一日も早い収まりを願い、日々のつとめに全霊を込めたい。ようぼく諸兄弟姉と共に10年先を目途に更なる一歩を目指したい。(真)

《4月月次祭 挨拶》

教会の果たす役割は大きい

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃のたすけ一条の真実のご丹精、誠にご苦労様でございます。ただ今は、教祖の228回目の御誕生日を、共に万感の思いで寿ぎ申し上げて、4月の月次祭を喜び心添えて勇んで勤めさせていただきましたことは、大変ありがたい次第です。思いますところお話しして、今月のご挨拶と致します。

さて、ただ今2名のようなほくによる月次祭感話がありました。皆さんも素晴らしいお話に感激されたことだと思います。

第1席目の竹内裕子さんは、未信者として信仰家庭に嫁いできてから、教会で温かく迎え入れられて、だんだんと信仰に目覚め、成人の歩みを一步一步と着実に進めてきた、その道中を語ってくださいました。このお話を聞いて、裕子さんは本当に心の素直な方だなと思いました。

その中でも、修養科の3カ月でお道に対する考え方が変わって、より前向きになったのだなと思います。おぢばは、運命の切り替えができる「めづらしところ」(五下り目・九ツ)です。ぢばの理のありがたさを改めて感じさせる感話でもありました。

第2席目の永石幸範さんは、壮絶なるいんねんと対峙と、そこから教会に導かれて御守護を頂いた、今日にわたる50年のいん

ねん果たしの道を語ってくれました。これほどまでの激しいいんねんの姿に、皆さんも驚かれたことだと思います。しかし、どんなに厳しく恐ろしいいんねんであっても、一生懸命になってこの道を信仰すれば、いんねんを果たしておたすけいただけ、結構にしていただけ、ということ、改めて実感した感話でした。

現在の永石さんは、そんないんねんなど微塵も感じさせない、大変明るく勇んだ、そして何より熱心に信仰しているようほくです。これが永石家が御守護を頂いた証の一つだと思います。

こうしてお2人ともそれぞれに、実に心に残る感話をしてくださいましたが、この2つの話に共通している点が、教会の存在の大きさです。所属の教会長が心を掛け、節目節目には適切な声を掛けて、丁寧に導いています。困った時に頼りになるのが教会であり、教会長であるということを思えば、この感話を通して理の親としての役割を果たすことの大切さがよく分かります。

また、本人たちも教会にしっかりと繋がって、親の声を素直に聞き分けて通っておられます。理の親と理の子の息が自然と合うところに成人があり、御守護にも繋がっていくのです。教会の果たす役割は実に大きいのです。

教会長はいんねんあつて教会に繋がってくださいましたようほく、信者を、心を掛けて導いていく役目があると思います。また、ようほくや信者の方には「教会は、私のために何をしてくれるのか」と期待し頼るだけでなく、陽気ぐらしの手本ひながた、たすけ一条の道場と教えられる理想の教会の姿への歩みを進めるために、「私に何ができるのだろうか」との思案に立って、何からでもつとめていく役目があると思います。

教会長とようほく、信者が心を通わせ合いながら、それぞれの教会が、陽気ぐらし世界の実現に寄与できる教会へと御守護いただけるように、勇んで各々の役目を果たしていただきたいと思えます。



今月の18日は教祖の御誕生日のめでたき日です。道の子である私たちお互いは、この日をお祝い申し上げるだけでなく、感謝の心を捧げたいと思います。私たち一人ひとりが信仰者として今日あるのは、教祖がひながたの道をお通りくださったおかげです。また、もたれきって安心してこの道を歩めるのは、御存命の理でお見守りくださり、導いてくださったっているおかげです。この教祖の御恩に心から御礼を申し上げて、教祖にご安心いただけるような心の成人をお誓い申し上げて、教祖の誕生祭を迎えさせていただきますいと存じます。

また、月末の29日は「全教一斉ひのきしんデー」です。報恩感謝の心でひのきしんに励ませていただきますしよう。

なお、5月月次祭の神殿講話は、「縦の伝道講習会」を開催いたします。少年会本部委員、治道大教会長の矢追雄蔵先生にご来会いただき、子弟に信仰の喜びを伝えるためのお話を聞かせていただきます。

どうか、来月も誘い合ってご参拝くださることをお願いして、今月のご挨拶とさせていただきます。

(要約)

立教百八十九年 四月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には陽気ぐらしを楽しみに、この世人間をお創め下され、爾来、永の年限変わるごときなき親心のまに／＼幾重の道も恙なく導きお育て下さいます御慈愛の程は、誠に有り難く勿体ない極みでございます。私共は、届かぬながらも御恩報じに努め励まして頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばよりお許しを頂きました芽出度き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、たすけ心を一つに合わせ、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、四月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を楽しみに参り集う芦津の道の子達が、喜び心も一人におうたを唱和して、一心に勇む状をも御照覧頂きますして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

さて、この月の十八日には、教祖には二百二十八回目の御誕生日をお迎え遊ばされ、御本部にて教祖誕生祭をお勤め下さいます。思えば教祖には魂の因縁ある元の屋敷、中山家へお帰り下され、時満ちて月日のやしろとお定まり下されてよりは、五十年の永きに互り、お口にお筆に親しく親神様の思召をお伝え下さいますと共に、いかなる厳しき道すがらも神一条にお通り下され、御身をもつて陽気ぐらしのひながたの道をお遣し下さいます。更にはやしろの扉を開かれてからは、御存命の理を以つて世界たすけの先頭にお立ち下され、私共をお導き下さいます親心の程は、只々有り難く心強き限りでございます。大教会四月の月次祭を勤めるに当たり、私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようほく一同は、教祖の御誕生日を心から寿ぎ申し上げると共に、ようほくの自覚と喜びを心に湛えて、世界一れつをたすけるために御丹精下されたひながたの道を手本に、教祖のたすけ一条の親心にお応えさせて頂ける道を、一手一つに心勇んで歩ませて頂く決心でございます。

何卒、一同が尽す誠真実の心をお受け取り下さいますして、教祖の道具衆として、たすけ一条に勇んで働かせて頂きますして、陽気ぐらし世界への道を明るく楽しく進ませて頂けますようお連れ通りの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《4月月次祭 感話》

義父母の信仰を手本に
お役に立てるようぼくに

稗島分教会 竹内裕子

このたび、月次祭感話のご指名を頂きましたが、一昨年、大教会長様が巡教にお越しになられて、会長さんと話をされたようで、直会のときに直接「頼むで」と言われ、お断りすることができずに今日を迎えました。

なぜ私が、と言葉が出ませんでした。ですが、会長さんから「裕子ちゃん、一般家庭からようぼく家庭に嫁いできて、何も分らないところから信仰を始め、今、稗島の婦人会の中枢を担ってくれているので、自信を持って話をすれば良い」と言われて、この話を受けさせていただくことになりました。

天理教との出会い

私は浄土真宗を信仰している一般家庭で生まれ育ち、大学を出て、

会社で長年勤めていました。そんな私が、36歳のときに今の主人と出会い、天理教とも初めて出会うことになりました。

主人と出会うまでは、天理教という宗教があることすら知らずに、周りに天理教を信仰している人もいない中で育ってきました。主人とお付き合いをしていく中で、結婚の話が出たときに、「結婚するならば、天理教を信仰してもらうのが条件で、それができないなら結婚はできない」と主人から言われ、今思えば上から目線で言われたような気がします。

そのときに初めて、天理教という宗教があることを知りました。そんな大きなことを言われ、結婚もどうしたものかと逡巡しました。信仰することは恥ずかしいことで

も隠すことでもないし、信仰していることに自信を持つべきだと思っていたのですが、やはり宗教はどこか敬遠されるところがあり、主人もいつ言おうかと迷っていたのだと思います。

母に、お付き合いしている方が天理教を信仰していることを伝えたと、猛反対でした。母は、父方の叔母が創価学会の信者で、「信仰しなさい」「聖教新聞を取りなさい」と事あるごとに言ってくるので、宗教に対して嫌気がさしていたからです。天理教も同じような宗教だと思っていたようで、「結婚には賛成はできない」と言われました。天理教がどういう信仰なのかも知らなかったため、母もそう言ったのだと思います。

私も勧誘などをしないとイケない信仰なら嫌だったのですが、主人自体は普通の人ですし、結婚してみてやっていけそうにないならそのときはそのときで考えようと思ひ、結婚することを決めました。私も年齢的には旬を超えていましたので、父は何も言いませんでした。

だが、母も最後には「絶対に勧誘をしないなら、結婚してもいい」と言ってくれました。

主人の父と母は、「光春が『信仰してくれないと結婚はできない』と言っているけれども、裕子ちゃんが良いと思えばしたらいいし、できないと思えば、無理にしなくていいから」と言ってくれたので、どこかホッとしました。強制をされていたら、たぶん結婚はしていませんでした。

逆にこの言葉で、「どんな宗教なのか知ってみたい」と思ったのも、正直なところでした。

不安と驚きの中で

結婚前に、前会長さんのお話の中で、「裕子ちゃん、竹内の家に帰って来るいんねんがあつて、神様のお引き寄せで帰ってくるのだから、光春のことを大事にせなから、かんて」とおっしゃいました。その言葉は、今も主人の心の中にきつとあると思います。

その後、会長さんから天理教の始まりや、どんな教えなのかをお



聞きし、人をたすける信仰ならや
つてみても良いなと思いました。
また不思議なことに、小学生の
習い事で母に連れていかれた場所
は、琴と三味線の先生の自宅でし
た。天理教を知らないときから、
神様のお導きで、将来おつとめで
困らないようにと、その道に進ま
せてくださったのかなと、会長さ
んのお話のときに感じました。
何も分らない中、初めて教会
の月次祭に参拝させていただいた
ときは、参拝場の後ろで見してい
ましたが、黒い着物、袴を着た方々
が、地方に合わせて楽器を弾き、
踊るなんて、不思議な光景でした。
最初は少し怖いなとも思いました。

また、巡教で来られた先生のお
話で、「尽くし運びをしないとあか
ん。尽くしをして病気が治り、御
守護をもらった」と話されたのを
聞いて、世間から入った私は、「尽
くし、尽くし」と言われても、本
当にそれで治るのか、生活もギリ
ギリで無理な場合もあるのにと、
そのときは「尽くし」ができな
つたら、病気は治してもらえない
のかと不安に思ったのを覚えてい
ます。

しかし今は、信仰を続けていく
中で「おつくし」をすることで、
御守護を間近にお見せいただいた
ことや、月次祭の講話でのお話を
聞かせていただく中で理解もでき
るようになりましたが、当時は世
間との違いが多くて、びっくりす
ることばかりでした。

また、初めておちばに帰らせて
いただいたときは、こんな世界が
あるんだと、見る物すべてがびっ
くりすることばかりでしたが、な
ぜか心は穏やかで、ずっと居たい
と思える場所でした。

幼なじみに、私が天理教の人と

結婚を決めたことを報告したとき
に、幼なじみは友人に連れられて
おちばに行ったことがあったらし
く、「ほんまに天理はすごいで、ゴ
ミ一つ、埃一つないところで、回
廊もピカピカで、心が洗われるよ
うな所やで」と言っていました。
本当にその通りだと思いましたし、
おちばは、何度でも行きたい場所
だと思いました。

おちばでの思い出

結婚前から別席を運び、4年く
らいかかりましたが、おさづけの
理を戴く日に、会長さんの弟さん
と集合場所に行ったとき「もしか
して一人かも」と言われ、時間にな
っても、本当に一人だったのに
はびっくりしました。

私一人のために、真柱様や本
部の先生方が身を清めてお出まし
くださるので、「間違ったらどうし
よう」と一気に緊張してしまいま
したが、無事に戴くことができました。

一人でおさづけの理を戴くとい
うのは、どういう意味があったの

かわかりませんが、大きな親心を
お掛けくださったのだなど、勝手
ながらに思っています。

また、修養科の話があったとき、
まだ長女が3歳、次女が1歳半と
小さかったので、なぜ今のタイミ
ングなのかと、行きたくない気持
ちもありました。実家の母も、小
さい子を連れて行くのは反対して
いましたが、子供たちが学校に行
きだしたら余計に行けなくなると
思い、心を決めて行かせていた
くことにしました。

不安だらけでしたが、若い人が
多く、保育士をしていた方もいた
ので、子供たちの面倒も皆さんに
見てもらいながら、修養科生活を
送ることができました。

修養科では、いろいろな方のお
話や、先生のおさづけで車椅子の
方がその場で立たれて、歩かれた
話など、その御守護はすごいと思
いましたし、若い人も熱心に信仰
している姿を見て、天理教に対し
ての考えが変わったのも修養科で
した。

私も子供たちも大きな身上、事

情もなく過ごせているのは、3カ月間、おちばで過ごさせてもらったからだと思っています。

義父母の信仰を手本に

まだまだ信仰の上では未熟で勉強不足ですが、月次祭や講社祭、教会の当番やひのきしんと、神様の御用はしっかりと務めさせていただき、徳を積んでいきたいと思っています。

主人の出直した父と母が通った信仰を、私たち夫婦が引き継いでやらなければいけないと、いつも主人と話をしています。義父母は、教会の月次祭、講社祭、当番、尽くし運びは欠かさずに、教会の御用を第一に勤めてこられたからです。

義父母が途切れることなく繋いでくれたおかげで、私たち家族も今結構に生かさせていただいているのだと思っています。ありがたいことに、子供たちも素直に信仰をしてきて、長女は、昨年末におさづけの理を戴き、次女は今、運び中です。また二人共、少ない

アルバイトのお給料の中から、毎月欠かさず、お供えをしてきています。

これからは、亡き義父母の信仰を手本に、教会の上に少しでもお役に立てるようによくならせたいだけけるよう、また、子供たちにもっともつと信仰のありがたさを伝えられるように、私たち夫婦が手本となれるように勤めていきたいと思っています。

稗島の教会に繋がる方々が、何もわからない未信仰の私を温かく迎えてくださり、仕込んでくださったおかげで、今、私はこの場に立たせていただいています。

主人の母は思ったことや言いたいことをズバズバと言う、稗島の中では肝つ玉母さんで通っていたので、私も主人の母・美砂子2号として、稗島が賑やかになればいいなと思っています。

そして「感謝、慎み、たすけあい」の言葉を忘れずに、神様に喜んでもらえるように、日々を過ごしたいと思っています。

いんねん納消の道は 御用を担い教会に繋がること

島原分教会 永石幸範

私は、島原分教会のようほく家庭で生まれ育ちました。教会とは3キロメートル程離れた所に住んでおり、普段は会社勤めをしています。今年は、永石家が信仰を始めてから、ちょうど50年の節目にあたります。

永石家のいんねん

私の家系は、精神の患い、身体が不自由であること、また、親子の縁が薄い、そして夫婦の仲違いといったいんねんで、家庭が治まらないことに、何代も代を重ねて苦勞してきた家系であります。

そんな中、50年前に凄絶な事件が起こったのです。祖父が錯乱を起こして刃物を振り回し、大暴れしたのです。曾祖父は亡くなり、止めに入った祖母は左手を失い、祖父は自ら命を絶ちました。

この事件は瞬く間に町中の話題となり、永石家の親戚からは、すべて縁を切られました。当時高校生だった母の弟は、跡取り息子にもかかわらず、家督を放棄して大阪に出て行きました。

体の不自由な親と娘だけになった私の母は、事件から数年間は、動揺と戸惑いでうろたえていたと思うのです。

そんな状況の中、熱心にお道の信仰をしていた母の叔母が親身になって、私の母のお世話をしてくださいました。私の母も当時は高校生でしたが、その叔母のお導きにより、恐る恐る教会の門をたたくことになったのです。

母は高校卒業後に就職しましたが、数年後には修養科へ行き、そこから本格的な信仰生活が始まりました。修養科修了と同時に、島



原分教会に住み込み女子青年として3年間勤め、教会での勤めを終えると、叔母の世話で、養子である父を迎え、そこに私たち3人の男兄弟が生まれました。

祖母を支えながらの道中は苦難の連続で、特に母親の苦悩は並大抵ではありませんでした。祖母は竹を割ったような性格で、何事も付度しない人でした。

ただ、気が短くて気性が激しいため、思ったことはすぐ口にし、機嫌を損ねると、我慢できずに言葉が荒げてしまうのです。言葉や態度がすぐ表に出てしまうので、その口が災いとなり、トラブルが

起こってしまうのです。

私の弟が仕事の休暇で名古屋から帰ってきたとき、気を遣って祖母にお土産を渡したところ、虫の居所が悪かったのか、「なんで帰ってきた」と弟の目の前で、そのお土産を部屋の外へ放り投げたこともありました。母は、そんな姿を見るたびに居たたまれなかったと思うのです。

私の妻は、家族が留守中の祖母の世話をしていました。機嫌が悪いと食事の御膳ごとひっくり返したりすることが度々ありました。「どうして、そんなことをするの……」と、塞ぎこんでしまい、心を病んでしまいました。

そうやって、感情の起伏が激しい祖母を、母は一生懸命世話していました。理性を失い、本能のまま生きる祖母にはもう耐えられないと、教会に駆け込んで涙するところが何度もありました。どこか遠くへ出て行きたい気持ちはやまやまだったと思いますが、実の母を放つてはおけないという狭間で、苦悩する毎日でした。

会長様はことあるたびに、「ばあちゃんが一番苦労した人だ。誰も通れない道を、必死で歩いてるんや。こんな苦労した人はいない。その後ろ姿を拜んで通らなければならぬよ」と励ましてくださいました。

祖母の出直しの節を通して

そんな祖母が、出直す10日ほど前に、私に遺言を託しました。その内容は、「今までありがとう。苦労をかけてごめんね。私が亡くなったら、天理教で葬儀をしてもらうように。親戚の人、教会の人、自治会の人に見送ってもらいたい」と感謝の気持ちをしたためた手紙をテーブルの上に置いていたのです。

祖母は身体は不自由でしたが、心は自由でした。50年前の事件があったから祖母が言いたい放題になったのか、元々言いたい放題だったからいまわしい事件が起きたのか、よく分かりませんが、信仰のおかげで、皆さんにお礼を言うて出直すことができたのだと思う

のです。心、すなわち魂をたすけていただいたことは、本当にありがたいことでした。

先ほど申しました祖母のエピソードだけ聞けば、ひどい祖母のイメージがあると思いますが、心は神様を頼り切っており、教会に行けば心が安らいでおりました。

おさづけを何よりもありがたいと受け取る人だったので。信仰心は厚くても、それを言葉に、また態度に表すことができない不器用な人だったと思っています。

永石家の親戚は、ほとんど仏教を信仰する家系ですが、島原の會長様には、真心のこもった葬儀を挙げていただきました。祖母が出直す直前や、葬儀の最中、そして葬儀の後の始末や年祭のことなど、一連の流れや見送りの様子を目の当たりにした親戚は、お道に対して深い関心を抱くようになりました。

母の弟である叔父は、50年間疎遠になっていました。私はどうしても叔父に繋がってもらいたくて、20年くらい前からおちば帰りの際

に、大阪の叔父を訪ねておりましたが、ほとんど会ってもらえず、手紙を書き残して帰るばかりでした。

祖母が出直す直前、その叔父に、祖母がどんな道歩んできたのか、なぜ、自分たちが信仰しているのか、そして教会の支えによって今日があることを伝えさせていただきました。その話を、叔父は涙を流して聞いてくださいました。

葬儀の後「母は安心して逝ったんだね、喜んでくれてるように思えた」と、姉である私の母に伝えてくれました。そして、「また帰ってくる」と言い残して大阪に戻りました。

祖母の出直しの節を通して閉ざしていた叔父の心を開き、叔父の心までたすけてくださったことに、神様の深い親心を感じたのです。

50年来の夢

私の父や母は、祖母が出直す前に、祖母に関わるものの一切を私の妻に頼るようになり、頼られることによって、家族との絆も深ま

り、心の病を克服しました。元気になったのです。

祖母の出直しという節は、親子仲、夫婦仲も修復してくださり、以前にも増して家族が団結して仲良くなったのです。

私の父や母、それに親戚から厚い信頼を得た私の妻は、勇みに勇んで、親戚の世話どりに奮闘し、昨年4月の誕生祭に、「一緒におぢばに行きましょう」と永石家の親戚に声を掛け回ってくれました。そして、永石家で初めて団参をすることができました。

13名の帰参でしたが、50年来の夢が叶ったのです。参加者の中には、これまでに何回お願いしてもおさづけの取り次ぎを拒否する人がいました。その人は膝が悪いと知ってましたので、教祖殿を参拝した際に、どうしてもおさづけをさせてもらおうと思って、祖母の話をしました。

「祖母は身体が不自由で左手がなく、右手の自由も効きません。おさづけを取り次いでも、手が生えてくるわけはありません。それ

でも、目が見える、耳が聞こえる、話をしたり、食事をする事ができる。すでに神様からお与えたいている御守護に気付かせていただける。ありがたいことをありがたいと思える心になれることが、本当の意味でのたすかりだと思います」と話したら、目に涙を浮かべて、おさづけを受けてくださいました。

その人にしてみれば、人生初のおさづけでした。教祖殿は教祖が親心を掛けてくださり、背中を押してくださいさるんだと感じた出来事でした。

また、帰参中、会長様が様子伺いに差し入れを持って、詰所の部屋を訪ねてくださいました。初めて帰参された方の中のある人が、「これだけ大勢の人が一つの目標に向かって動く姿には何か不思議な力があるはず。その原動力になるのは何ですか」と会長様に尋ねられました。

すると会長様は「一言で言うと、感謝です」とお答えになりました。質問したその人は、祖母の姿が目

に浮かんだのでしよう、「感謝」に感銘を受け、初席を運んでくださいました。

この団参は「祖母を偲んで」という名目で企画しました。祖母が晩年帰りたくても帰れなかったおぢば。そして、永石家を救ってくださったおぢばを見ていただきたいという気持ちから、私たち夫婦が親戚にお願いに回って実現した団参です。

参加した人たちは、祖母を変えた信仰に興味もあったと思います。ほとんどが旅行という感覚でした。しかし、おさづけの現場を目にし、おぢばの理に触れたとき、最初は、「別席は遠慮する」と言っただけの人たちが、こぞって「基礎講座」を受講してくださいました。

そして、受講したその翌日には、さらに5名の方が初席を運んでくださいました。本当にありがたいと思うと同時に、ぢばの理の尊さに強く心を打たれた瞬間でした。

参加した人たちは、「また来年もお願いします」と頼みに来られたり、祖母の実家では、30年間中断

喜びの奉告祭

和鎮部属・鎮惠分教会（大阪府交野市）は、5月6日、大教会長をお迎えして、今村志保・四代会長就任奉告祭を執り行った。

正午、今村会長の祭文奏上に続いて、大教会長が挨拶。

「この道は陽気ぐらしの教えであり、その手本となる教会は、雰囲気が大切である。新しい会長を志に、陽気ぐらしの雰囲気満ち溢れた教会にしてもらいたい」と期待を述べられ、「ちびと息一つに心を合わせ、親の声に沿ってたすけ一条の道を勇んで歩んでいただきたい」と望まれた。

最後に、昨年に出直した前会長の28年間にわたる教会長として勤めた功績を称えられた。

一手一つにおつとめを勤めた後、今村会長が挨拶。「私共の初代は、常々『この道は親孝心の道』と申しております。これから教祖のひながたを目標に、喜び心、勇み心をもって親々に喜んでいただく

るよう、たすけ一条の道を精いっぱいつとめさせていただきます」と決意を述べた。

記念撮影をした後、直会は屋外に場所を移して、参拝やひのきしんに来会した教友も交えてのバーベキューを行い、和やかな時間を過ごした。

参拝者は40名であった。



野外練成会

少年会

4月25日、少年会芦津団（加世田洋団長）は、信太山青少年野外活動センター（大阪府和泉市）で野外練成会を実施し、少年会員39名、育成会員20名、計59名が参加した。

午前10時30分より入所式。おちばを遙拝した後、加世田団長から「火・水・風の親神様の御守護に感謝し、たすけあいの心で、自然を満喫して楽しんでください」とお話があった。

オープンニングゲームで参加者同士の緊張をほぐした後、クラフト作り。一人ひとりがオリジナルのお箸を作り、この日のお土産とした。

昼食のバーベキューを挟み、キャンプファイヤーで行うスタントの練習を班ごとに行った。

その後、人気テレビ番組「逃走中」を模したゲームを実施。大自然の中で、班で協力してハンターから逃げ回ったり、捕まった人を開放するためのミニゲームを行っ

たりするなど、大いに盛り上がった。

場所を移してキャンプファイヤーを行い、ファイヤーゲームや班ごとに練習したスタントを披露し、楽しい時を過ごした。

最後に退所式。遙拝の後、花岡副団長より話があり、解散した。

参加者からは「初めて会った子とも仲良くなれて、とても楽しかった。来年も、友達を誘って参加したい」との声が聞かれた。



婦人会第108回総会

教祖誕生祭翌日の4月19日、本部中庭を主会場に「婦人会第108回総会」が開催され、日曜日ということもあり、国内外を問わず約3万5千人の婦人会員がおちばに帰り集った。「総ての会員がおちばへ人を誘っておちばへ―別席者とともに」と、この総会に向けてはそれぞれが人をお誘いして総会に参加するよう促されていた。

式典では、中山はるえ婦人会長様が告辞として「次なる塚へ向かって、親神様・教祖にお喜びいただけるような成人の姿を目指して、婦人会員お互いに励まし合い、勇ませ合って、力強く歩ませていただこう」と呼びかけられた。続いて真柱様のメッセージを内統領・宮森与一郎先生が代読。その中で、女性の徳分を忘れず、世上の常識に流されず、教えに素直に歩みを進めることが大切とされた上で、「親神様、教祖の思召を求め、日教えを実行する努力を重ねることとは、ひながたをたどることに通

じると申しても過言ではない」と論じられた。

◇ ◇ ◇

本部の式典後、芦津支部（井筒年子支部長）は、詰所で「支部のつどい」を開催。昼食を取りながら、支部のつどいシートを使い、当日の婦人会長様のお話や、真柱様のメッセージを聞いての感想を書く時間を設けた。その後、大教会のお下がりを頂いて解散した。

18日夕方には、青年会に協力を得て、詰所食堂で「ほっこり夜会」を開催。婦参者に楽しんでいただいた。また、17、18日の2日間、2階大広間でバザーを開催した。



18日夜は詰所食堂でほっこり夜会を開催



女子青年は教祖にお誕生日のケーキをお献じ

また芦津女子青年（岩切寿代委員長）は、教祖にお誕生日ケーキをお献じしようと、17日午後からケーキを作成。パティシエの荒木めぐみさん（恵庭分教会）を中心に、華やかなケーキを作り、お献じさせていただいた。

海外婦参者歓迎会

海外部

4月14日から21日までの日程で、真明彰化教会（洪克明会長）と真明新教会（陳惠卿会長）から、併せて36名が婦参。またブラジルから1名、アメリカからも1名が

婦参し、大教会4月の月次祭、ご本部教祖誕生祭を参拝した。

その内、台湾から婦参された方の中から、8名が初席、7名が中席を運び、5名がおさづけの理を拜戴した。

17日夜には、海外部主催の歓迎会が、天理市内の飲食店で開催された。海外部長の歓迎の挨拶、真明彰化教会の世話人・井筒文夫役員の乾杯の音頭で会食がスタート。和やかな雰囲気の中、盛況裏に終えた。



同時通訳機を使って月次祭感話を聞く海外からの婦参者

大教会新教務分担任命

4月16日、新たな教務分担任が発表された。
新体制の下、教祖百五十年祭、立教二百年という次の塚へ向けて、
心一つに進ませていただきたい。

相談役

前会長夫人・森内富雄

常任委員

井筒文夫・守田清一
岩切正教・竹内義忠
山本義範・山田道弘
加世田 洋・岩切正義

会長室

室長 山本義範
奥田正儀・浜田慶郎

おほこび掛

主任 瀧本真二郎
奥田真治・花岡忠和

修理部

部長 湯川正罔
井筒文夫・瀧本真二郎

会計部

部長 井筒文夫
岩切正教・山本義範
部付 葭内 浩

広報・眞明編集局

局長 奥田真治
瀧本庄司・奥田正儀
河合善洋・今川聖一
榎 康紀・梶川和人
松森誠太・吉田充人
岡島藤也

名簿管理委員会

委員長 山田道弘
浜田宣郎・奥田正儀
瀧本 亘

祭事部

部長 山本義範
次長 川畑澄博
祭儀掛 主任 山本義範

神殿お守所掛 主任 山本義範
浜田宣郎

雅楽掛 主任 奥田真治
木村真次・石川健郎

おつとめ研修掛 主任 山田道弘
今川聖一
井筒ちぐさ・岡島きよの
中村美津代・望月恵美
岩切孝子・山田秀子

布教部

部長 竹内義忠
次長 山本義範・奥田正儀
葭内 浩・樋川泰士
岡本久昭・榎 康紀
瀧本一太郎・梶川芳征

育成部

宗我道明・松森誠太
松本 優

部長 山田道弘
次長 西本義之

中村俊和・石川健郎
今川聖一・川畑正博
瀧本 亘・梶川和人
望月慶太・吉田充人

海外部

部長 瀧本庄司

岡本公夫・洪 克明
瀧本耕四郎・中村俊和
樋川泰士・奥田正儀
河合善洋・瀧本 亘
瀧本一太郎・梶川芳征
松森誠太・吉田充人

教養部

部長 井筒文夫
次長 瀧本庄司・木村真次

立花善文・梶川和隆
河合善洋・瀧本 亘

ひのきしん部

吉田充人

部長 岩切正義
次長 加世田 洋

河端芳雄・木村真次
梶川芳男・河合善洋
花岡忠和・新居里実
西本興正・村田光伸
湯川正信・吉田裕樹

教務部

部長 奥田正徳

教務掛

主任 奥田正徳

副主任 立花善三・浜田宣郎

庶務掛 萩内 浩・樋川泰士
梶川和人
浜田宣郎・奥田正儀
榎 康紀

史料部

部長 奥田正儀

榎 康紀・梶川和人

信者部

部長 山本義範
次長 山田道弘

瀧本眞二郎・吉田 裕和
浜田宣郎・石川健郎
河合善洋・今川聖一
榎 康紀・梶川和人
瀧本一太郎・梶川芳征
松森誠太

詰所部

詰所主任 井筒文夫

企画委員会

奥田正徳・岡島秀男
立花善三・木村真次
奥田正儀・岡島藤也
竹内義忠・山田道弘
岩切正義

会長室報

本部勤務

〔布教部社会福祉課〕

石川 晋一(直 轄)

〔アメリカ伝道庁〕

瀧本 昂郎(紀 周)

〔少年会本部〕

徳野 真弘(紀 周)

〔海外部庶務課〕

洪 善武(真明彰化)

勤務者

〔大教会〕

加藤 聡(丸 芳)

勤務辞退

〔大教会〕

河合 祥三(直 轄)

立教189年4月16日

教務部報

教養掛(4月)

主任

西本 義之

教養掛

梶川 芳征・梅本 理弘

望月 恵美

教人登録

宮崎 博(青 港)

立教189年3月4日

ようぼく講習会受講

関本 周平(紀 周)

立教189年3月15日

おさづけの理拝戴《3月》

山下 保(芦山都)

奥田 元郎(豊 野)

永瀬きよふみ(白 地)

松本祥太郎(西 浜)

高司 優夏(芦大熊)

〔拜戴日順 5名〕

初席《2月》

〔1名〕紀内

《3月》

〔1名〕四ツ山、芦大熊

〔順序運びより 2名〕

月例統計(自令和8年1月1日)至令和8年3月31日)

項 目	初 席	のおさづけ 理拝戴	修養科修了	教 人
大 教 会 (1)	1	1		
東 津 野 川 (23)				3
吉 野 川 (29)	2	2	2	
島 原 (16)				
日 方 (15)	2	2		
稗 島 津 (7)	1	1		
本 津 高 (2)				
日 始 良 (5)				
津 和 司 (6)		1	3	1
門 別 島 (6)				
當 大 島 (26)	2	5		1
沖 縄 崎 (3)				
尼 崎 (2)	2	1		
四 山 (5)	2			
大 冠 (2)				
島 下 (1)				
天 保 山 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)	1			
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)		1		
紀 周 (3)	4			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵 庫 眞 洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)	1			
明 道 (1)				
芦 東 (1)			1	
和 鎮 (3)		1		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)				
眞明彰化 (2)	1	1		
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	19	16	6	5

立教189年 こども おぢばがえり 7/27~8/3

- ・こどもおぢばがえりは、インターネット(帰参申込システム)での申込となります。
- ・全教会に配布した「申込キー」で帰参予定人数とカレー食数の申込ができます。
- ・カレー食数には制限があります。
- ・定員制行事(バラエティー189、ピッキーステージ)のみ、公演前日に帰参申込システムから予約ができます。
- ・詳細は、要項やオフィシャルサイト、所属教会でご確認頂き、不明な点は少年会・履康紀までお尋ね下さい。



こども おぢばがえり オフィシャルサイトへ

申込期間			
6月	7月	8月	
20	1	20	26 27 3
責任者登録 6/20 10時開始	カレー食を申込む 場合(7/1 10時 ~7/20 24時)		帰参報告 受付時間 (8時~17時)
カレー食キャンセル待ち申込期間 (7/21 12時~帰参日2日前の16時)		13時より帰参報告 受付開始	